

---

## ホストクラブ「Yamato-nadeshiko」番外 「驚愕」

y

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ホストクラブ「Yamatō-nadeshiko」番外「驚愕」

### 【Nコード】

N0760G

### 【作者名】

y

### 【あらすじ】

ホストクラブ「Yamatō-nadeshiko」本編（<http://ncode.syosetu.com/n4852d/>）番外。キャンサー・G（豪）が初めて光を店で見た一年前。それは、過去亡くした最愛の妹が成長した理想そのままの姿だった。妹を想い彼は・・・

(前書き)

?表サイトの本編はこちらになります

<http://syosetu.com/pc/main.php>

?m#w1-4&amp;ncode=N4852D

?続編になります(18歳未満閲覧禁止)

<http://syosetu.com/user/novelimanga>

[n a g e / t o p / n c o d e / 3 9 3 4 6 /](http://syosetu.com/ncode/39346/)

ー そんなバカな

あの子がいる

お兄ちゃんと無心に俺にすがり付いてきた大切な存在

凍った冷たい世界で無残な姿で死んでしまった筈の存在

それが成長して、俺の前にいる

そんなバカな

生きていたのか

> i 2 2 6 1 — 3 2 2 <

「豪、今週末店来るだろ？」

「・・・あ？あー新しく入った女共連れて行こーとは思ってるが何だよいきなり？」

「そりゃあのクソくだらねえ法律の対応策の件を話す為に決まってるんだろが？どーよネオ池袋？結構締め付け強くなってるんだろ」

「そーだな、北口のホテル街なんかはもうダメだな・・・露西亞女は排除されて中国系ばかりになってるが・・・こっちの西口も時間の問題だ」

「ネオ新宿もひでえモンだーでな、俺さ路線変更しようと思ってるんだ。最近入った子でな・・・まだ若エが、かなりイイもん持ってるから店の顔として売り込もうと思ってるんだよ。余り俺好みじゃねえ大人しい子だが今の時代に合わせた方向ってモンにしようと思ってるなあ・・・で、お前に太客になって欲しいんだよ。ま、箔付けっ

「つか・・・お前が後盾になってくれりゃあNO・1は確定するしな」

「はあ？お前の店のNO・1はあのアフロさんだろーが。ずっとそうだったじゃねえかよ」

「いや実質アレでいいんだが・・・プロ過ぎるんだ。ちょっと法律の影響が収まるまで素人っぽいのを前面に出してメディア露出も多くしようと思ってるだよ」

「・・・お前らしくねえな。まあ仕方ねえか、背に腹は変えられねえもんなあ・・・まあいい、店で話そうぜ。指名する位別に構わねえよー」

「きつと気に入るぜお前。そっちの気はねエことは知ってるが、まあ素直で偉いこと美少年だしなーじゃあそんな時な、また」

そんな風に「Yamatō-nadeshiko」オーナーから電話を貰い訪れたー淡い色の髪を持った細身のホストがオーナーに連れられてテーブルに来た

ー俺は固まった

シャワーを浴び、ソファに座った。下着だけを身につけた女がブランデーを差し出して来たのでそれを一気に煽る

「ボス？どーシタの？怖い力オしてるネ・・・」

ネオ池袋の夜景が女の白い頬に映る。酒をまた作らせ、差し出してきた女の長い髪を掴み自らに押し付けると女の舌がそれに絡み付いてくる

「・・・もつと奥まで啜えろ」

そう命じながら酒をまた一気に煽った。女の長い金髪が動く

「・・・あり得ねえ・・・」

思わず呟いた俺の言葉に女の「？」という視線が届くが頭を掴んで

押し付ける――黙って啜えてりやいいんだ  
生きていたのか？

そんなバカな

あの子の葬儀

小さな棺に入った、余りにも硬く強張った体  
余りにも白かった 顔

蠟人形のようにだった

お兄ちゃんと明るく発していた唇は閉じられ

唇の周囲は皺が寄り 引かれた紅は赤く

俺を真つ直ぐに見上げてきた瞳は永遠に閉じられて

いつまでもその頬に顔を擦り付けて泣く俺は引き剥がされ

燃やされ 黒い煙が小雨の降る空に昇って行き お前の中身は四

散した

固形になり 何人もの人々にお前のからっぽになった残骸が分けら  
れ

粉になり 形すら無くなったお前 白く灰色な粉だけが残された  
それをただ掴み空に向かって咆哮する――指の間からさらさらと  
零れていく――

俺はいつまでも動けなかった

「は、初めましてキャンサー・G様！本日は御来店誠にありがとうございます  
ございます！」

緊張しているのだろうか、少々のもりが初々しい印象を与える目  
の前の美少年。淡い色の肩までの髪、深い海のように蒼く澄んだ大  
きな瞳、華奢な体、明るく潑刺とした高い声――

「おーう豪ちゃんどうよこの子？可愛いだろ？なあなあ〜NO、1  
にしてやってくれや」

オーナーはいらねえよ。とつとと事務所に戻りやがれ、ウゼエんだよ  
「あの・・・お隣に座っても宜しいですか？」

ああ、座ってくれ。もつとよく見せてくれーお前だろ？お前な  
んだろ？

「なあ豪。女達ちよつと貸してくれねえか？ステージ華やかにして  
えからよ？」

勝手に持つてけーとにかくこの子と話させる

「お酒作りますね」

テーブルの酒に手を向けー先細りの白い手。淡い髪の手柔らかい  
匂いが鼻をくすぐった

「どうぞー私も何か頂いても宜しいですか？」

何でも呑んでくれ、好きなモン頼めよー何でも欲しいモン言え  
よ。俺はずつとそうしたかったんだよ

「キャンサー・G様はネオ池袋の顔役の方だって伺いました。私み  
たいな新人をテーブルに呼んで下さってありがとうございます。私  
「P o k e - d a n z」の舞台DVDで何度も見て・・・あの独創  
的な衣装を全部引き受けてるって聞いた時驚きました」

いいー社交辞令はいいんだよ。まあ客商売だから仕方ねえが・  
・そんなことじゃない、お前に言っただけの言葉は

「お忙しいのにー」

小さな顔を上げ、俺を見た

「来て下さって、嬉しいですよ！」

お兄ちゃん来てくれたの？嬉しい！

「ああーいつだってお前が望めば・・・何があつたって会いに  
来るよ」

女をソファに押し付け、自分を埋める。獣のような声を上げる金髪  
「ー」違う、こんな色の髪じゃねえ。もつと淡い色で、柔らかい匂  
いがしてー「ー」こんな香水の毒々しい匂いじゃない。あの子そのも  
ののような清廉で優しい、匂い

「・・・ボ・・・ス、どうシタの?・・・イツモと・・・違うヨー」  
そんなに・・・乱暴にー「

黙ってる。声を出すんじゃねえよ。あの子の声はそんな墮落した声  
じゃねえ。もつと澄んでいて清らかな

「・・・生きて・・・いたんだ・・・」

女の肉に刺激を作りながらただ自動的にそれを動かす。とにかくこ  
の何だか分からねえ衝動を吐き出すしかねえんだ。そうしなきゃど  
こに向けられるか分からねえー「あの子に向けることだけは避け  
なければ、回避しなければ、決して気付かれないように、二度と喪  
失わない為に

あの棺からお前は生き返って

いや、悪夢だったんだ。現実だったとしてもあれは別人で

どこか俺の知らない所でお前は真っ直ぐに育って

きつと幸せだったんだ。だからこそあんなにも美しく、可愛らしく、  
清楚に

俺の事は忘れちゃったのか?そうだよなまだ6歳だったもんな

少しずつ思い出せよ。待ってるから

俺のことを思い出してー「あ施設の会いに行った時のように」

お兄ちゃん」って言うて抱きついてこいよ

今の俺ならお前を守る。何だって望みは叶えてやれるー「あ  
頃の無力なガキじゃねえから

俺の妹は生きていた。そして何の偶然かー「俺の前に現れた

女の腹にブチまけてー「シャワーを浴びさせて帰らせた。一人に

なりてエ

「・・・綺麗に、なつたんだな・・・」

テーブルサイドの棚から一枚の写真を取り出す。もうセピア色に色褪せてしまった、皺が幾つもついているボロボロの古い写真。復元する気にはならなかった。あの子はこの写真を本当に嬉しそうに首にかけておもちの財布に入れていたから。あの子のぬくもりが残っている筈だから

「本当に・・・綺麗だ」

中学の学生服を着た俺と・・・妹が施設の門を背景に笑顔で映っている。施設の保育士が撮ってくれたたった一枚残った写真。お前があの悪夢の土手で横たわっていた時もこれは首の財布に入っている・・・財布の紐で首を絞められたお前

「幸せか？何で夜の世界にいる？そんなことするなよ・・・俺の所に来いよ。大切に大切にしてやるからよ・・・一緒に住もうって言ったらいつも喜んでくれたじゃねえか・・・」

写真の幼いお前に話しかける。あのクラブで会った美しく成長したお前に話しかける。頭に浮かぶのはただあの美しい笑顔だけだ。何の作為も無い、穢れていない、太陽のような潑刺とした笑顔・・・先程女を抱いている時にそれが重なった

「・・・冗談じゃねえっつの・・・」

妹なんだ。んな事考えてる訳ねえだろ・・・男の汚エ欲望でまた怖い思いをさせる気かよ・・・冗談じゃねえ！

お兄ちゃん、おかえり！ごはんももうすぐ出来るから先にお風呂に入っててね

カウンターキッチンに目を向けると・・・あの綺麗な存在がいた。料理を作りながら俺を振り向いている

美味しい？え？味濃いかな・・・？ごめん初めて挑戦したお料理だったから・・・次は頑張るから・・・食べてくれる？

リビングテーブルに目を向けると・・・座っていて、上目遣いで俺

を見ている

今度のお休みドライブに連れて行ってくれるの？ホント？嬉しい！私お弁当張り切って作るね！

ソファに座る俺の下、お前は床に膝をついて笑っている――嬉しいように、俺の膝に手を添え見上げてくる

「ああ・・・何処でも連れて行ってやるからな。お前の弁当楽しみだよ・・・」

幻ということは分かっている。クスリは女をやる前に少し鼻に含んだが――ンなモンとつくに切れてる。俺は普通に幻覚を見てるようだ。幻聴まで聴こえるよ。ラリってんのか？狂っちゃってんのか？「何でも――叶えてやるよ。お前が望むことならば」

狂っている俺はその幻覚の頬に手を添えた。？という表情に変化した幻の顔を引き上げ屈み――接吻をする

お兄ちゃん・・・

都合のいい幻の存在は頬にある俺の手に、白い小さな手を添えて微笑む。僅かに頬を朱に染めて、恥ずかしがるように視線を逸らす

だめ・・・

視線を逸らすその可憐な仕草に俺は煽られた。その身を抱え上げソファに横たわらせ――首筋に顔を埋める。柔らかく甘い匂いだ。さつき吐き出しただろうが――どうしようもなく衝動が湧き上がる。折れそうに華奢な体に触れてしまふ――女の体。お前は女だ。分かっている――6歳の頃の直線的な体じゃない。柔らかい曲線を持った、男を受け入れる優しい体

「――いて、いる」

それは言っではいけない言葉だ。幾ら狂ってようと分かっている――硬く強張るお前の体をゆっくりと柔らかく解し押し広げ――女を抱くのにこんなに必死になるのはいつ振りだ？――細心の注意を払って、反応を見ながら俺を埋める。先程の汚エ女なんかとは正反対のお前の内

だいすき・・・おにいちゃん・・・

不快に手にこびりついた白いものを手近な布で拭く。未だそれは溢れ、さつさと止まれと布で強く抑えた――

「・・・何やってんだよ・・・俺ア・・・」

激しい自己嫌悪に陥る。女を抱いた後でもあの綺麗な存在を夢想して自慰をしていたのだ。覚えてたのがキジもあるまいし・・・バカか、俺は

「・・・あゝなっさけねえ・・・」

写真は無意識に裏返しにしていた――見られなくなかった

「やつべえ、な――嵌っちまったんか俺は・・・あんのオーナーのヤロー・・・何もかも計算通りってワケか・・・」

もう一度シャワーを浴びる為に立ち上がる。大丈夫だ。決して気付かれない。俺はお前をそんな対象に見ることはしない――絶対に気付かれないように

大切な存在だ

やっと目の前に現れた

手に入れることが出来るだろうか？

もう一人の後盾の存在は分かった

様子を伺うようにテーブルに来た、NO・1の偉丈夫な男

ただのホストではない。分かっている。あの男は手強い

お前と視線を交し合う様を見て、理解したよ

――邪魔だ

もっと早く出会っていたら

いや、離れ離れにならなければ

ずっと俺と共にいてくれたならば

いや

大丈夫だ。軌道修正は効く筈だ。きっと

諦めてたまるかよ

絶対に諦めない

お前を手に入れるまでは

決して気付かれないように

笑顔を曇らせることのないように

俺を信用させて

安心させて

どんなに時間が掛かろうが

お前は自分から望んで俺の元へ来させてやる

幻を現実にしてやる

俺のものに

その時こそ 言おう

言うことが赦されるだろう

愛していると

（後書き）

読んでくださってありがとうございました

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0760g/>

---

ホストクラブ「Yamato-nadeshiko」番外 「驚愕」

2010年10月28日05時33分発行